

## 桃の節句

新潟市中央区西大畑町に通称、「どつぺり坂」とよばれる勾配のつよい階段がある。

万代橋を渡り、榎谷小路から寄居町の交差点を直進、右に日本銀行、中央警察署、左に県知事公舎を通り過ぎてさらに直進するや、まもなくその階段に出くわす。

昭和四十年代、この近くにボーリング場があった。今は跡形も無く階段の隣には洋風の建物が並んでいる。「どつぺり」の名は、落第するという意味のドイツ語からきている。その昔、旧制新潟高校の寮があり、学生連中がこの坂を下りて古町界隈を闊歩した。あまり遊び歩くと落第してしまうぞ、との警鐘の意味があるのだそうだ。この「どつぺり坂」を上りきった斜め向かいに「砂丘館」がある。旧日本銀行新潟支店長の役宅だった。

三月初旬、ここで明治から昭和初期の雛人形が展示されていると聞き訪れた。ひな祭りといえば、童謡「うれしいひなまつり」のメロディと重なってしまう。毎年、デパートなどで商品としての雛飾りが賑わう中、情緒溢れたこの曲が流れるからだ。

受付を済ませ、狭い階段を上がると2階ふた間続きの部屋に雛飾りが並んでいた。鈴木家と佐藤家から拝借したという。鈴木家のお雛様は七段飾りのみであったが、

佐藤家は七段飾り、四段飾り、それと、お雛様や「お道具」その他人形類が部屋いっぱい置かれていた。どれも素晴らしいものなのだろうが、残念ながら、飾られている品々をただ眺めるだけで、あいにくその審美眼は持ち合わせていない。

伝統ある祭りであるが、ひとつ不思議に思うことがある。桃の節句のひな祭りが女の子のお祝いであるのに対して、男の子は端午の節句であるが、端午の節句の五月五日は「こどもの日」として祝日になっている。何だかんだ理由付けして祝日を増やしているながら、桃の節句の三月三日が祝日でないのはどうしてだろうか。一方は、京の貴族の雰囲気がいまい、もう一方の端午の節句は、飾る武者人形や鎧兜からすると武家時代を反映しているようだ。こうしたことが影響しているのだろうか。

それはさておき、旧家の人たちが、節句にこうした雛飾りを楽しんでいたと思うと、往時の優雅な暮らしぶりが窺えるというものである。

今の時代、アパート暮らしや部屋数の少ない多くの家庭では、とてもこうした大掛かりな段飾りなど出来るものではない。タンスが嫁入り道具からはずれてしまったように、住生活の変化で昔からのしきたりや行事が薄れてしまうのは寂しい気もするが、時代の流れを食い止めることは何事も難しいものなのかも知れない。